

岡山医療センターにおける 医療通訳システムの構築の試み

白井由行 中村 信 形山優子 山内芳忠

IRYO Vol. 63 No. 5 (322-326) 2009

要 旨

日本語のわからない外国人が病院を受診した場合、わが国の医療機関は外国人に対応する体制が整っているとは言えない。そこには医療通訳という人材システムの構築が必要である。2005年4月から岡山医療センターに設立された国際医療協力室の活動の1つとして、外国人に優しい病院をめざして、医療通訳システムの構築をはじめた。当院においては、人材集めに、新聞、病院広報誌を用いて、医療通訳セミナーを開催した。医療通訳の心構え、病院の構造、医療現場の状況などの教育を行った。また、職員および外部の医療通訳サポーターの医療通訳技術向上のために、毎週、医療英語の勉強会を開いている。それらによって、医療通訳サポーターを集めることに成功した。外国人が来院した場合には、病院内では、地域連携室、国際医療協力室が外国人診療に対応し、16か国語の医療対応表を配布することで、即座に外国人の診療の補助となるようにしている。医療通訳は予約制で少しではあるが謝礼もしている。今後、医療通訳システムを広域に広げるには、まだ経済的な問題点、医療通訳の教育などの問題点は多い。

キーワード 医療通訳, 外国人, 病院

はじめに

交通が発達し、諸外国との交流が盛んになってきた現在、わが国には、多くの外国人が住んでいる。しかし、日本語のできない外国人が日本の医療機関を受診した場合、外国人に対応するシステムはまだないといってよい。実際、日本国内で統一した保健医療専門用語を理解できる通訳（以後、医療通訳）の養成システムはなく、国家的な資格もなく、登録システムもないのでそれらの確保は困難な状況である。一部の外国人の多い地域でも、医療通訳をボラ

ンティアや、地方公共団体、NGOなどに頼っているに過ぎない¹⁾²⁾。

岡山医療センターのある岡山県でも人口の約1%、約2万人の外国人登録がある。1位が中国人、2位が韓国人、3位はブラジル人である。しかし、岡山県の医療機関で、日本語の話せない外国人が受診した場合、医療通訳のシステムはほとんどないのが現状である。当院に、2005年4月より、外国人にもやさしい病院になるために、国際医療協力室が発足した。その活動目標の一つとして、医療通訳の確立を掲げた。

国立病院機構岡山医療センター 国際医療協力室
別刷請求先：白井由行 国立病院機構岡山医療センター 国際医療協力室 〒701-1192 岡山市北区田益1711-1
(平成20年8月12日受付、平成21年3月13日受理)

Establishment of a Medical Interpreter Service in the Okayama Medical Center
Yoshiyuki Usui, Makoto Nakamura, Yuko Katayama and Yoshitada Yamauchi, NHO Okayama Medical Center
Key Words: medical interpreter, foreigner, hospital

国際医療協力室の立ち上げとその活動

2005年4月より、当院が独立行政法人国立病院機構となった時期とともに、院内の組織の中に、国際医療協力室が誕生した。当院の目標である、1. 患者様にやさしい病院、2. 働く人にやさしい病院、3. 地域の人にやさしい病院の1をさらに発展させて、外国人にもやさしい病院を目指して、国際医療協力室が作られた。国際医療協力室は、外国からの医療研修を受け入れるとともに、外国人患者が普通に医療を受けられる環境作りを目指すことになった。また、東京の国立国際医療センターを中心とする国際医療協力のネットワークにも参加することになった。

外国人診療の問題点

病院に日本語のわからない外国人が訪れた時に、まず戸惑うのは、病院の表記がほとんど日本語であるということである。病院案内の看板やパンフレットは日本語表記である。外国人にはそれらが読めない。外国語表記がなければ困るのである。また、病院職員とのコミュニケーションの問題もある。外国語と日本語とをつなぐ通訳が必要となる。しかし、医療には、専門用語が多く、それらに精通した医療通訳が必要となってくる。しかし、日本の全国規模でそれらを養成する機構もないし、日本にはそのシステムもない。2005年の時点では、日本のある地域では、ボランティアや医療機関などによる医療通訳養成の勉強会があったり、医療通訳派遣のシステムの試行が行われていた。

当院での医療通訳システムの構築

2005年5月に当院で突然英語の通訳が必要な事態が起こった。岡山市で英語教師として働いていたアメリカ人男性が心筋梗塞で緊急手術となり、その後、かなりの期間ICU入室となった。重症でせん妄状態にもなり、看護師から通訳の要請があった。それが、地方新聞に掲載され、岡山県内から通訳のボランティアをしてもよいという電話、手紙が約30件集まった。

しかし、医療通訳と普通の英会話とは違うことを認識することが重要である。専門用語の知識も重要であるが、医療に携わる人には、医療倫理を遵守す

る必要がある。また、通訳の身分の問題、責任の問題等がある。それゆえ、英語が話せるから、すぐ医療通訳にというわけにはいかない。教育・養成が必要である。アメリカには医療通訳者が守らなければならない倫理要綱というものがあり、みのお英語医療通訳研究会が和訳している²⁾。

そこで、当院でも、ボランティアとして集まった名簿を中心として、医療通訳の養成を行おうということになった。1つは、医学英語を中心とした勉強会であり、日本人および外国人の講師を頼んで、医学英語教室を院内で行うことにした。ほぼ週1回のペースで、2006年9月より医学英語の勉強会を開催している。院内、院外を問わず医療英語を勉強したい方に開放している。もう1つは、医療通訳の倫理要綱、病院の仕組みを教育するために、年に2-3回くらいのペースで医療通訳セミナーを開催することにした。

2006年12月23日、2007年3月21日、2007年7月の3回、当院で医療通訳セミナーを開催した。開催するにあたり、病院広報誌「ジャーナル“やさしさ便り～岡山医療センターの今”」(<http://www.hosp.go.jp/~okayama/>)に医療通訳セミナーの広告を掲載した。約40名が集まった。通訳できる外国語は、英語がほとんどであるが、スペイン語、フランス語、ポルトガル語、中国語、韓国語、ベトナム語なども確保している。これらの活動を通じて、医療通訳ができるサポーターの名簿が作られた。今後の医療通訳の確保の基礎となるものとなった。

当院の医療通訳のシステムは、図1のように地域連携室、国際医療協力室が連絡役となっている(図1)。日本語のわからない外国人患者が来院した場合、まず、16カ国の外国語と日本語対応の診療補助表を配布する³⁾。それは、即座に行われる。非常に便利であり、文字の読める外国人患者なら、意思の疎通はできる。しかし、複雑な診療に関する問題が発生したときには、医療通訳が必要となる。医療通訳は予約制としている。予約日時が決まったら、医療通訳の名簿から、適当な医療通訳サポーターを探し、来てもらうわけである。通訳者には1時間約1000円の謝礼もしている。しかし、当院では、医療通訳の必要頻度は1カ月に数回程度とそう高くないのが、実情である。

2007年12月には日本医学英語教育学会が主催する医学英語検定のために医学英語検定問題集も出版されて、医学英語、英語医療通訳を目指す人にとって

岡山医療センターの外国人診療

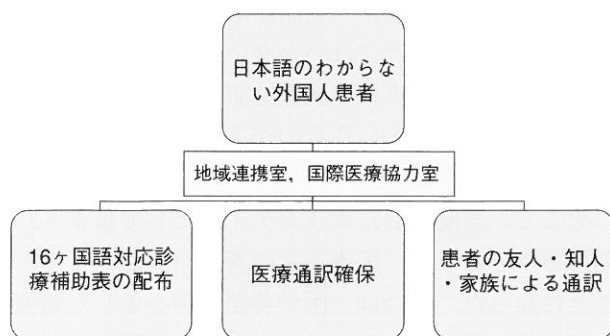


図1 外国人診療の流れ

は、道標となるべきものができた⁴⁾。2008年4月には、第1回の医学英語検定試験が関東、関西、北陸地区の3カ所で行われた。当院からも数人が受験をし、合格した。

また、平成19年（2007年）は、岡山県で医療通訳のシステムが始動した年となった。岡山県において医療通訳システムは、2004年より、岡山県国際交流協会（県の外郭団体）が医療通訳セミナーを行っており（<http://www.opief.or.jp/>）、主に医学英語通訳の養成を行ってきた。2007年8月より英語と中国語の医療通訳の派遣を試行し始めた。予約制で、交流協会に連絡し、予約時間を決めて行うものである。謝礼もあり、京都などのシステムを参考にしている（<http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/informat/173/index.html>）。

考 察

外国人診療のためには、病院内表示の外国語表記、外国語のパンフレット作りなどのハード面と、外国語のできる人材（医療通訳）の確保のソフト面、両者の整備が必要である。

ハード面は予算があればすぐにでもできる。しかし、医療通訳という人材はすぐには養成できない。わが国には、現時点では医療通訳の国家資格はない。しかし、2007年12月には日本医学英語教育学会が主催する検定試験のための医学英語検定問題集も出版されて、医学英語、英語医療通訳を目指す人にとっては、道標となるべきものができた⁴⁾。この医学英語検定試験が広がって行くのを応援したい。

医療通訳はほとんどのところがボランティアで行われているようである。しかし、資格ができる以上、有償で行われるべきである。当院では、医療通訳サ

ポーターと呼んでいるが、少ないながらも謝礼をする。通訳にプロ意識を持ってもらうためには、無料ではよくない。時間と技能を使うのであるから、コストがかかるのである。これを、将来的には医療保険でカバーすべきではないかと思う。実際、移民の多いオーストラリアでは、国家的に医療通訳システムがあり、医療保険でカバーできる範囲が細かく規定されているようである¹⁾。

医療通訳を養成するには、その地域で通訳養成の教育機関となり、登録を行う中心的な役割を果たす施設が必要である。わが国では、いろいろな地域で、AMDA等のNPO、NGOや、県の機関や病院などさまざまなところが養成所となっている（<http://medint.jp/>、<http://www.h5.dion.ne.jp/~mia/>）。しかし、いつまでもボランティアでは、優秀な医療通訳の永続的な確保は困難であろう。

岡山県では、岡山県国際交流協会が医療通訳養成講座が散発的に開かれている。英語、中国語が始まっている。

当院でも、医学英語の勉強会が2006年9月より始まった。なぜ英語かという、やはり英語は国際語であるからである。国際学会では英語が公用語である。われわれ日本人も含めて、英語が母国語でない国々の人が、外国語をまず習うのは英語の場合が多く、外国人の中には、英語を話せる人も多い。実際、医学英語の勉強会は、院外からも生徒が5人以上集まり、そこで勉強した医療通訳のノウハウは、他の言語でも応用が可能である。また、この活動を広報することで、他の言語の医療通訳の確保にも役立っている。同時に、当院では、医療通訳セミナーという医療通訳のテクニックや倫理面を説明するセミナーを開催し、30名以上の参加を得た。それにより、英語を始め、中国語、ハンガリー語、フランス語など語学が堪能で医療通訳可能な人材バンク名簿ができた。人材を確保することは医療通訳のシステムを稼働させる上で一番重要なことである。

医療通訳のシステムを日本中に広めるには、財政面をはじめコーディネーターなど専用スタッフの確保や医療通訳の養成など多くの問題点がある。今後は、当院でのノウハウを岡山地域や国立病院機構ネットワークにも広めて、わが国の医療通訳システム作り貢献したい。

外国人診療に対する病院体制づくり

- ハード面 外国語表記, 外国語パンフレット
- ソフト面
 1. 医療通訳セミナーの開催
 2. 医療通訳サポーターの名簿
 3. 語学(外国語の医学用語)の勉強会
 4. 外国人診療の手順の作成

1, 2は病院独自に行う場合と, 行政, NPOなどが行う場合がある

図2 外国人診療に対する病院体制づくり

ま と め

外国人診療のためには, 病院内表示の外国語表記, 外国語のパンフレット作りなどのハード面と, 外国語のできる人材(医療通訳)の確保のソフト面, 両者の整備が必要である。その中でも医療通訳の人材の確保は一朝一夕には困難である。地域の公共機関や, NPO, NGOなどが中心になり, 医療通訳セミナーを開催することによって, 医療通訳の人材バンクを作ることが先決であり, それにより通訳の確保

につながり, 通訳のシステムを構築できると思われる(図2)。

〈謝辞〉

当院の医療通訳システムの構築にあたっては, 厚生労働省国際医療協力研究委託費18指1「国際保健医療協力の効率的な運営のためのネットワーク構築に関する研究」(清水利夫班)の分担研究「ネットワーク施設における外国人診療のあり方に関する研究」の援助を受けた。記して謝意を表したい。

[文献]

- 1) 松尾博哉. オーストラリアの医療通訳制度事情. 日医誌会誌 2005; 133: 268—72.
- 2) みのお英語医療通訳研究会. プロシーディング「医療通訳—Equal Access への挑戦」. 大阪: みのお英語医療通訳研究会; 2006.
- 3) AMDA 国際医療情報センター. 16カ国語対応診療補助表. 東京: AMDA 国際医療情報センター; 2002.
- 4) 日本医学英語教育学会編. 医学英語検定試験3・4級教本. 東京: メジカルビュー社; 2007.

Establishment of a Medical Interpreter Service in the Okayama Medical Center

Yoshiyuki Usui, Makoto Nakamura, Yuko Katayama and Yoshitada Yamauchi

Abstract When a foreigner who is not conversant in Japanese visits a hospital, he/she may face difficulties, because there is no established system to help such people. To alleviate this problem, the development of a medical interpreter system is necessary. As one of the activities of an international medical cooperation established in April, 2005 at the Okayama Medical Center, with the aim of providing a kinder service to foreigners, a medical interpreter service was established. To collect talented people, we held medical interpreter seminars, which were publicized in a local newspaper and in our hospital's information magazines. The seminars taught the desired attitude of medical interpreters, the structure and function of our hospital and about the medical scenario. To improve the medical interpreter skills of the staff and external medical interpreter supporters, we started a weekly open study session of medical English. These made it possible to collect talented medical interpreter supporters. When a foreigner visits the hospital, the regional alliances room and the international medical cooperation room immediately help to overcome the communication problems by providing him/her with medical care table that is in 16 languages. A reservation is necessary to obtain help by medical interpreter supporters who in return receive some rewards. Economic problems limit our effort of spreading this medical interpreter system in a wider area.